

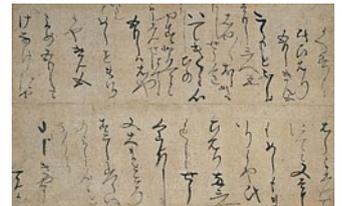
平成20年度購入文化財一覧

【東京国立博物館】(計7件)

- 1 ○種 別 <絵画>
○指 定 重要文化財
○名 称 般若菩薩像 (はんにゃぼさつぞう)
○時 代 鎌倉時代・13世紀
○品 質 絹本着色
○寸 法 等 1幅 縦104.5cm 横58.8cm
○作品概要 般若菩薩は、胎蔵界曼荼羅中の中央中大八葉院の直ぐ下の持明院中央に描かれる重要な菩薩である。しかしながら、単独での信仰はほとんどなかったようで、遺品は少なく、他には般若菩薩を中心に各尊を描いた京都・醍醐寺の般若菩薩曼荼羅(鎌倉時代・重要文化財)が知られる程度であり、仏画の独尊像としての本格的作品は本件以外見当たらない。仏教絵画史、また仏教史的にも希少な作品であり、加えて鎌倉時代13世紀に遡る仏画として、繊細精緻な文様描写など表現的にも優れた貴重な作品といえよう。
- 購入金額 84,000,000円



- 2 ○種 別 <書跡>
○名 称 書状 (しょじょう)
○作 者 等 豊臣秀吉筆
○時 代 安土桃山時代・天正14年(1586)
○品 質 紙本墨書
○寸 法 等 1幅 本紙 縦27.8cm 横43.1cm
○作品概要 掛幅装。本紙は元々は折紙であったものを折目で裁断し継合わせ表装する。料紙は楮紙系で比較的厚めのもの。豊臣秀吉(1537-98)は安土桃山時代を代表する武将で、織田信長の後継者として天下を統一した人物。差出は「てんか」とあり宛所を欠くが秀吉がその室杉原氏(北政所)に宛てた自筆書状と推測される。特に文中に「ふしん(普請)」、「ひはり(檜割)」そして差出書に「きょう」とあることから、秀吉が上洛して自身の居所としての聚楽第普請の状況を報じているものと考えられる。仮名交じりの文体であること、自身の差出書を「てんか」という仮名(けみょう)で記している点、「こもし」、「きんこ」、「おおまところ」など自身とかかわりの深い人物について略称を用いている点が室杉原氏宛と推測する根拠である。また強弱・細太が極端な癖のある字は秀吉の筆致の特徴をよく表している。
- 購入金額 8,000,000円



- 3 ○種 別 <彫刻>
 ○指 定 重要文化財
 ○名 称 十二神将立像 申神（じゅうにしんしょうりゅうぞう しんしん）
 ○時 代 鎌倉時代・13世紀
 ○品 質 木造、彩色・截金、玉眼
 ○寸 法 等 1 軀
 ○作品概要 頂に申の標識を表し、頭部をわずかに左に向け、右手に大刀を執り、右足を上げて立つ。頭巾・領巾・肩甲・胸甲・表甲・腰甲・獣皮・甲締具・腰帯・天衣・窄袖・鱗袖・裙・袴・脛当・沓をつける。

頂に申の標識を表し、頭部をわずかに左に向け、右手に大刀を執り、右足を上げて立つ。頭巾・領巾・肩甲・胸甲・表甲・腰甲・獣皮・甲締具・腰帯・天衣・窄袖・鱗袖・裙・袴・脛当・沓をつける。

彩色の概要は次のとおり。身色は朱の具、頭巾は白緑地に花文、領巾は獣皮、肩甲は花文、胸甲は緑青地に截金で6ツ目入り二重亀甲繫ぎ文、表甲は金箔地に小礼、腰甲は内区が丹地に唐草、外区が花文、腰帯はベンガラかと思われる地に白緑の文様があるが詳細不明、天衣は表白緑、裏丹、鱗袖は、上膊部が茶色地に截金による格子と斜格子の合わせ文、鱗部は緑青と群青の縞、窄袖はベンガラ地に唐草文、裙は表が朱地に截金による4ツ目入り3重斜格子、裏が丹地で文様不明、袴は丹の具地に菱形花文、脛当は窓内に花文、外は白緑地に群青の斑点、沓は丹地に墨とベンガラの斑点。

構造の詳細は彩色のためあきらかでないが、X線写真を参照すると、体幹部は前後矧ぎで、背板風にさらに1材を矧ぐ。頭部は挿し首で、前後矧ぎ。玉眼嵌入。肩・肘・手首・足首で矧ぐ。右腰から右脚大腿部にいたる部分は別材矧ぎで、さらに体幹部材との間に細い材を1材はさむ。右膝下別材矧ぎの可能性はある。

○購入金額 80,000,000円



- 4-1 ○種 別 <彫刻>
 ○名 称 能面 翁（のうめん おきな）
 ○時 代 南北朝～室町時代・14～15世紀
 ○品 質 木造、彩色
 ○寸 法 等 1 面 縦19.1cm 幅15.3cm
 ○作品概要 式三番の翁舞に用いる翁面。白式尉ともいう。ボウボウ眉、口ひげは毛描き、顎ひげは植毛する。顎を切り離して紐で吊る。表面は白く塗り、面裏は茶褐色の漆を塗る。



- 4-2 ○種 別 <彫刻>
 ○名 称 能面 三番叟（のうめん さんばそう）
 ○時 代 室町～安土桃山時代・15～16世紀
 ○品 質 木造、彩色
 ○寸 法 等 1 面 縦17.0cm 幅13.4cm
 ○作品概要 式三番の三番叟に用いる黒式尉。ボウボウ眉、口ひげ、顎ひげは植毛する。顎を切り離して紐で吊る。表面、面裏ともに黒く塗る。



○購入金額 15,000,000円

- 5 ○種 別 <漆工>
 ○名 称 松椿蒔絵硯箱（まつつばきまきえずりばこ）
 ○時 代 室町時代・16世紀
 ○品 質 木製漆塗
 ○寸法等 1合 縦22.4cm 横21.6cm 高4.5cm
 ○作品概要 蓋の肩を削面として口縁に玉縁を廻らした、被蓋造の箱。身の内中央に硯・水滴を嵌めた下水板を収め、その左右に懸子を収める。
 表面は全体を黒漆塗として、蓋表に金研出蒔絵を主体にして、土坡に松・椿の樹を表わす。松葉や松の実には、絵梨子地風の表現が用いられ、付描で葉などを描いている。蓋裏と懸子の見込みには、金研出蒔絵で松と椿の折枝を表わしている。

○購入金額 34,200,000円



- 6 ○種 別 <染織>
 ○名 称 小袖 紫白染分縮緬地笠扇桜文字模様（こそで むらさきしろそめわけちりめんじかさおうぎさくらもじもよう）
 ○時 代 江戸時代・18世紀
 ○品 質 縮緬地に友禅染と刺繍
 ○寸法等 1領 身丈151.0cm 衿61.5cm
 ○作品概要 縮緬地を紫と白に染め分け、友禅染で団扇・扇・笠模様を上から下へ枝垂れるように表わし、燃金糸や紅・萌黄などの釜糸で桜模様とカタカナの文字を散らした模様を刺繍した小袖である。文字模様は伊勢大輔の「いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな」の一部を、町方の女性にも親しめるよう、カタカナで表わしている。もともとは振袖であったが、留袖に仕立替えられている。肩山が一度裁断されていること、衿が欠損していること、左袖の袂には不自然な部分に継ぎがあることなどから、かつては打敷などに仕立て替えられていたが、小袖に仕立て直したものと考えられる。

○購入金額 7,000,000円



- 7 ○種 別 <染織>
 ○名 称 小袖 紅綸子地桐樹鳳凰模様（こそで べにりんずじとうじゅほうおうもよう）
 ○時 代 江戸時代・18世紀
 ○品 質 綸子地に絞り・刺繍
 ○寸法等 1領 身丈158.0cm 衿63.0cm
 ○作品概要 雲文と雑宝文を織り出した綸子地に、鹿の子絞りで裾から立ち昇るように桐樹の立木模様を表わした小袖である。桐樹の周囲にはさまざまな姿で飛び交う鳳凰を、紺・縹・萌黄・紅・白・金茶といった釜糸や燃金糸で刺繍する。また、桐の花や葉の一部も刺繍で表わされる。裏地には紅絹が用いられ、裾の袴には厚く綿が入る。留袖の袂は模様が切れてしまっていることから、もともとは振袖だったものを留袖に仕立て替えたと考えられる。

○購入金額 1,800,000円

